

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
な か ま 編 集 係

〒285-0025
佐倉市鍋木町 198-3
電話 (043) 485-1801

2 ページ 絵空事 坪井 栄子
3 ページ 気になる木 清澤 瞳子

タカイヨ、タカイヨ 村田 長保
な か ま 編集会議の受賞報告 金井 義彰

め し

永 見 一

老妻と食卓を囲んで半世紀毎日つかっている茶碗を手につくづく眺め、自分の人生をふり返ってみることがある。

私たちの年代はめじどころか鼻の下を通るものであれば何にでもかぶりつくという実にあさましい一時期を体験した世代です。

武士は蹄の音に目を覚し、貧乏人は茶碗の音に起きるといわれる。そんな育ちのせいか食事といえば、ただかぶりつくことだけに終始して、味覚をたのしむ心の余裕や豊かななど欠片も持ち合せていなかった。

もつとも大人になり、それ相應の身分になるとなにかにつけ体裁をとりつくろう術もおぼえて、めったにボ口は出さないのだが、こうした飢餓感、終生私から離れられないようです。

テレビ番組で近年大食いのコンテストをよく目にする。見るたびに圧倒されるが、最近ではとてつもない量をペロリと平らげる華奢な女の子がいたりする。人は見かけじゃない。世の中は本当に分らない。

今、まさに飽食の時代、市場には食料品があふれ金さえ出せばなんでも、世界のどこからでも手に入るが、スーパーやコンビニの売れ残り、レストランでの食べ残しなどのため年間二千万トンもの廃棄物が発生し、これは国連の食糧援助機関・WFP世界食糧計画が援助した食糧の約三倍に相当するといわれています。環境悪化で洪水や干ばつなどのほか、内戦や紛争で農地が荒れた地域では安定した食糧生産ができない。政情不安や経済破綻、慢性

的な貧困などの要因も絡み七人に一人が苦しんでいます。

我が国の自給率は三十九%穀物に至っては僅か二十八%自給率世界百二十四位という衝撃の数値です。これは食糧が不足しているからではなく世界中の人が健康な暮らしをするのに十分な食糧があり、問題はない所と余っている所があるからです。

「このごろ食事がとても丁寧になったわよ。そういわれてみて私もようやく食事に対する態度や想いがそれほど変わったのかと、以前のようにものも言わず、ただかぶりつくような真似だけはしなくなつた。

茶碗に対する礼儀、そこから伝わってくる感謝の心を持つようになったのは、これも歳をとったせいでしょうか。

自分は飢えずとも、果してそんな地球で暮らしていて、幸せでしょうか。(編集委員)



絵空事

挿入歌『かささぎ』に、涙を誘われたテレビドラマを見た。戦中戦後の時代、歴史の荒波に翻弄された日韓両国の男女の物語だ。

そのかささが、白と黒の羽の色を見せて、海峡の波間を懸命にはばたいている映像だけで、三日連続ドラマの主題を表現している様な見事な演出と思えた。売れっ子脚本家の作品だが、激動のあの時代、作者はほんの子供だっただろうに、主人公達の背景を豊富に想像出来る何かをすでに感じとっていたのだろうか。今は亡き著名な作家が「創作とは想像の結果だ」と例をとって話していた事を思い出す。浅はかな私は、想像とは、絵空事を思いつく事だけと誤った解釈をしていた。

絵空事というので、私の実体験を紹介したい。二十数年前、搭乗機の座席で機内誌を

めくっていたら、中から書きかけの絵ハガキが出てきた。

文面から、まだ訓練期間中のスチュワーデスが、訓練教官へ宛てたラブレターの様だと知った。

そんな大事な物を忘れた彼女のその後は？ 今頃は？

私の絵空事創作は次の通りなり。その後無事に訓練修了出来た彼女は、未だに空を飛んでいる。幾つもの恋をしたが今も独り身で、その日も交際の長かった彼と、最後の別れをしてきた。彼女にはその夜からスケジュールが入っている。「別れきて 機上制服となる 七夕夜」

年に一度の恋人達の逢瀬の宵、天の川めざすかの様に飛び立つ夜間飛行業務に就いた彼女よ。この後、川の隔たりも無く、かささぎも無用な新しい恋の訪れという 続き話を待っていて欲しい。

(新白井田 坪井 栄子)

タカイヨ、タカイヨ

あるトラベル・エッセイを読んでいたら、パリの蚤の市(ちなみに「フリー・マーケット」の「フリー」は free であり、free ではない。念の為)で、日本人観光客相手に「タカイヨ、タカイヨ」と言って呼び込みをしている店員がいたという一節に出会った。

ぼくは瞠目、眉に唾をつけそうになった。

著者はタチの悪い日本人が冗談半分にウソを教えたのだろつと半分笑いながら、半分嘆かわし気に記していた。

もしかするとその「たちの悪い日本人」がぼくかもしれないのだ。

二十年程前、まだパリ行き直行便がアンカレッジ経由だった頃、初めてクリニヤンクールの蚤の市を訪れた。

余りにしつこく「安いよ、安いよ」と呼び掛けられたの

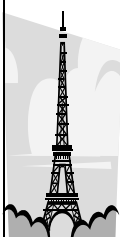
で、ついいたずら心が湧き、皮ジャン売場の若い店員に向かって「ノン、ノン」と人差し指を左右に振った。そして正しい日本語は「高いよ、高いよ」なのだと教えた。

その店員どこ迄分かったのかキョトンとした顔をしていたが、まさかそれが発信源となつて十余年後の「タカイヨ、タカイヨ」迄連綿と...。まさか。

ぼくと同じいたずら心を抱いた日本人は大勢いたろつし、「タカイヨ、タカイヨ」が定着すれば、それはそれで面白いパリ名物になると弁解したり、パリの裏面史の一頁を飾つたかもとVサインを出した気分とが相半ばした。

早速エッセイの著者に手紙を出した。「そういう囁は愉快だから大いに吹聴してみたら」という返事だった。

(新白井田 村田 長保)



気になる木

暮れのハワイの旅、お目当てのXマスのライトアップは、地球温暖化対策で控え目。

翌日は東海岸巡り。日系二世のドライバー兼ガイド氏は車窓から見える大樹を指し、「あの木何の木、気になる木です。何の木でしょうか」と問いかける。「ネムです」すかさず私は答えた。「ピンポイント」と返ってくる。ハワイでは「サマニア・サマ」と呼んでいた。いつしか私は、歌を口ずさんでいた。

「丸い丸い月が出た。森じやほうほうと淋しげに、あれふくろうが鳴いている。ちんちろちんちろ虫が鳴く。ネムの木もみな、おねんねよ。里のお家に灯がとまり、坊やもとつくにねんねして、ペンペン草の夢をみた」と。母がよく歌っていた子守唄だ。歌い乍ら、初めてネムに出会った頃のことを思い出していた。

五十年も経ったのだろうか。

ある夏、函館山岳会の仲間

と、鳥海山へ登った。大雪渓

のトラバース用のアイゼン、

ピッケル、小屋泊用のシュラ

フ等重装備。残雪の多い年の

大雪渓を無事通過、突然開け

た視界に紺碧に輝く日本海が、

飛び込んでくる。感動の一瞬。

小屋泊の翌日、象潟へ下り、

吹浦温泉泊。酒田から山寺へ

と芭蕉の跡を巡る。途中の酒

田公園で、幻の花かと思う、

美しい紅の花に会う。余りの

美しさに息をのむ。ネムだ。

梅雨明け、七、八日程の落

葉高木のこの木は、夕暮れの

薄明かりの中、細い絹糸を無

数に集め淡紅色の花を咲かせ

る。繁茂した白緑の葉は柔ら

かい小葉からなる羽状複葉。

夕暮れ、葉根の細胞が水分不

足となり、静かに葉を閉じ睡

眠をはじめ。紅の花達は、

そっと空に浮かぶ。眠る木

「ネム」

(井野 清澤 瞳子)

なかま編集会議の

受賞報告

六月十二日、東京丸の内の東京国際フォーラムで、社団法人日本善行会の平成二十年度の特別表彰式が行なわれ、「なかま編集会議」が善行銀賞を受賞しました。

当日は、公民館の「なかま編集係」の担当職員が同行し表彰式に出席し賞状と記念品の善行盾を戴いてきました。

日本善行会は、昭和十二年に設立された七十年ほどの歴史のある団体ですが、実践をとおして明るい住みよい社会をつくり国の発展と国際親善に寄与することを目的として、善行を表彰し善行精神の普及に努めています。

毎年、全国から寄せられる推薦に対して、善行調査委員の調査と関係官公庁に調査を依頼し、選考委員会の厳正な審査を経て受賞者を決定しているとのこと。

なかま編集会議が、佐倉市

ならびに千葉県からの推薦により善行会から表彰されるのは、前回の平成九年度と今回で二度目になります。前回は表彰が九部門にわかれていましたが、公生活への貢献の部の成人善行表彰を受賞しました。今回は部門別をやめ善行金賞と善行銀賞の二つに簡略化されていました。

受賞者は、北は北海道から南は沖縄まで、全体で善行金賞が個人14名と1団体、善行銀賞が個人68名と6団体で、千葉県は善行金賞が個人2名、善行銀賞が個人4名と、なかま編集会議の1団体でした。

個人の受賞に比べると団体の受賞が全部で7団体と少なくなっています。善行金賞を受賞したのは神奈川県川崎防火協会でしたが、銀賞は、「なかま」の他は、点字勉強会、交通安全隊、社会福祉法人などでした。

(編集委員 金井 義彰)

7月の黒板

『なかま』原稿募集のお知らせ

『なかま』の2・3面は、市内の皆様の投稿によって作られています。原稿は随時募集しています。

[原稿規定] 字 数 650字(13字×50行)以内。ワープロによる原稿(縦書き)でも結構です。

内 容 随筆・・・日常の出来事、生活の中で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などご自由にお書きください。

『なかま』に対するご意見・ご感想などもお待ちしております。

いただいた原稿は、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただきます。

問い合わせ 佐倉市立中央公民館 (第2・第4月曜日は休館日です)

電話 485-1801

URL <http://www.city.sakura.lg.jp/kominkan/cyuou/index.htm>

わくら道

用事を済ませた後、臼井の探索をすることにし、駅前からどう歩こうかと思案。地図を持っていかなくったことを悔やみながら長源寺から、阿多津の墓へ。田んぼのへりを歩き船戸大橋へ。風がでていささか寒さを感じながらも船戸夜雨の案内板を読む。臼井城に登る手前に円応寺がありお庭を拝見。人ひとり

いない境内で風の音を友に、遠い昔の人の声が聞こえるかなと思ひ、静かに耳をすませてみました。(本当に聞こえたら怖いですが)円応寺からすぐ横の道を登るとそこは臼井城址。目の前に印旛沼が大きく広がり、今も昔と多少の景観は変わっていたとしても美しさは失われていないと感じ、「おゝい」と過去に呼びかけてみたい気持ちになってしまいました。

あがとき



『なかま』が表彰されました。受賞報告をご覧ください。昨年八月には印旛郡市社会教育委員連絡協議会表彰というのを受けました。今回は全国レベルの表彰です。金賞でなかったのが残念(欲張りすぎかな?)。十年前にも同様に表彰されたとのこと。ひとえに継続のたまものですね。編集会議はカレッジ生十六

名、有力OB、公民館の職員二名で構成されております。実は毎年変わる在校生委員に対し、『なかま』の生き字引K氏、軽妙洒脱なN氏、舌鋒鋭いH氏のOB三名の活躍あつてこそその継続でもあります。山あり谷あり、今月で381号。継続は、みなさまのご投稿がなければ成り立たないのは勿論のことです。あなたの文章が活字になって、佐倉の歴史をつくっていきます。ぜひご挑戦を。お待ちしております。

(矢島)